

シンポジウムの記録と 故鶴見和子さんの紙上参加について

西川 祐子

I 鶴見和子著『社会変動と個人—第二次世界大戦における敗北の前と後の日本』第6章の翻訳

この2年間の人間学研究所の活動は多様であったが、なかんずく鶴見和子文庫をひらいて改めて読む試みに多くの時間を割いた。企画の途中でおもいがけないことに鶴見和子さんの訃報に接し、企画のもつ意味も変化した。京都文教大学人間学研究所は鶴見和子没後一周忌にちかい2007年6月23日に公開シンポジウム「生活綴り方から『戦後』を考える—鶴見和子文庫をひらいて」を開催し、当日の会場は熱気につつまれた。シンポジウムの記録を本誌の特集として組むにあたり、出席のかなうはずのない故人にも登場していただく方法はないか、と考えた。そこで本号に生活記録運動にかんする鶴見和子の英語テキストの翻訳を掲載することにより、故人による時空をこえた紙上参加をお願いした次第である。本学図書館へ鶴見和子文庫を寄贈くださったご遺族の許可のおかげで、今回このように翻訳試作品を掲載する運びとなった。翻訳作業は、わたしたちに多くのことを教え、考えさせた。学恩にふかく感謝したい。

大学での昼休みの時間帯に行われていた人間学研究所での「ランチタイム・ワークショップ」では、「生活綴り方から『戦後』を考える」のシンポジウム準備作業のなかで、鶴見和子がアメリカ合衆国プリンストン大学に提出し受理された博士論文をもとに英語で出版した *Social Change and the Individual-Japan before and after Defeat in World War II*, by Kazuko Tsurumi

(Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1970) の第6章 VI The Circle: A Writing Group among the Textile Workers を参考資料として読みはじめた。澤井余志郎さんと「生活を記録する会」が1950年代に四日市で展開した生活記録運動をあつかう章だからである。この本にはまだ日本語版が出版されていない。シンポジウム終了後も有志メンバーが第6章を日本語に翻訳する作業を半年以上つづけた。翻訳の文章は、共同翻訳ということもあって文章がまだ十分に整わず、まちがいの残っているのではないかと危惧されるのであるが、これを機会にぜひ諸方面からのご叱正をいただきたい。

翻訳のために、第6章が対象としている戦後の生活記録運動について、現在では復刻版で読むことができる『紡績女子工員生活記録集』I、II全12巻（日本図書センター、2002、2008年予定）や『「四日市公害」市民運動記録集』全4巻（同、2007年）を参照した。すると鶴見和子によって日本語から英語に翻訳された資料や参考文献を、こんどは英語から日本語に翻訳する必要が生じた。原則として引用された原資料にあたり、原文の日本語テキストを引用するようにつとめた。資料引用に際して鶴見和子により要約的に、あるいは説明をくわえた英訳が行われている場合には、翻訳の注としてその旨を記した。日本語テキストと英語テキストのひとつひとつの単語の対応、文脈の作り方には、とうぜん微妙なズレが生じる。翻訳一般を考える上においても興味深い作業であった。

また鶴見和子が文中に用いている社会学、心理学、哲学などの用語の、執筆当時の使われ方、時代背景などについて調べる必要が生じ

た。それぞれの学説史をかいま見る思いであった。

翻訳作業は最初に分担を決めた第1原稿をもちより互いに検討しながらつないでゆく作業を重ね、翻訳語や文体の統一をおこなって第2原稿を作成、それをさらに日本語訳として読めるテキストとするようところがけた。参加者が多数であったことや、作業の延べ時間が長かったことから仕上がりまでには紆余曲折があった。

その間に、とくに付注の内容を確認するべく原典にあたる段階で、注にあげられた本の多くを京都文教大学図書館所蔵の鶴見和子文庫のなかで確認することができ、また引用箇所にも鶴見和子自身と思われる筆跡で傍線が引かれたり、短い感想が書き込まれていたりしていることを発見した。鶴見和子文庫を形成するこれらの書籍はかつて論文執筆のためにアメリカまで運ばれ、著者とともに帰国して自宅の書庫に置かれていたものと思われる。生活記録運動にかんする調査資料やフィールド・ノートも荷造りされて太平洋を往復したことであろう。文庫からは個人の蔵書と蔵書所有者の研究活動との関連を跡付けるヒントをいただいた。

澤井余志郎さんと「生活を記録する会」の方々は口々に、「鶴見和子さんが博士論文執筆のためにアメリカに赴いたときには、おいてけぼりをくったようなさびしい気がした」と言われていた。しかし翻訳をすすめるにつれ、学術論文の記述からとつぜんのようになかびあがる対象描写のリアリティにうたれる箇所がいくつもみつかった。遠隔地でこの章を執筆していた当時の鶴見和子は、「生活を記録する会」という研究対象を、思考のなかであるからこそ、いっそう身近に感じていたのではないか。「自己をふくむ集団」の研究を提言した鶴見和子であるが、この提言は後続する研究者たちにたいし、研究者が研究対象とむすぶ関係性や設定すべき距離について、さらには出会って交流することから生じる双方の変化について、生き生きとした証言と、簡単には解きがたい課題とを遺したといえよう。

II 鶴見和子著『社会変動と個人—第二次世界大戦における敗北の前と後の日本』と英語版読者

ジョン・ダワーは、『敗北を抱きしめて—第二次大戦後の日本人』全2巻（三浦陽一・高杉忠明訳、岩波書店、増補版出版は2004年）の第3章「虚脱—疲労と絶望」の冒頭を「日米両国は、史上類を見ない壮絶な戦争を共通に体験した。とはいえ、東京湾に現れたアメリカ人の姿は、日本人の目にはまるで異星人であった。過去の体験においても将来の見通しにおいても、勝者と敗者の間にはあまりにも大きな断絶があった。勝ち誇ったプライドと独善的な自信に満ち、輝ける未来への計画を携えてやってきたアメリカ人たちが出会ったのは、鋭い観察眼で知られる学者・鶴見和子のうまい言葉を借りれば、猛烈な『死の社会化』を経験した日本の民衆であった」（91ページ）と書き始めている。

鶴見和子への言及はこの箇所のみであるが、ジョン・ダワーの著作の原書タイトル*Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*と、ここに第6章を訳出した鶴見和子の著書のタイトル*Social Change and the Individual-Japan before and after Defeat in World War II*とは、「日本 Japan」「敗北 Defeat」「第二次世界大戦 World War II」の三つの単語を共通してもち、テーマを共有している。さらに言えば、第二次世界大戦における日本の敗北という同じテーマを、ジョン・ダワーは、いかんともしがたく勝者の立場から、そして鶴見和子はおそらく戦後のアメリカの大学で執筆したからこそよけいに勝者の立場から見ることを避けて、敗者の立場から書いているという点において対照的である。

引用したジョン・ダワーの短い文章から、ダワーが鶴見和子のこの本をある敬意をもって読んだことがうかがえる。彼は鶴見和子の著書から「死の社会化 socialization for death」という概念をとりだした。鶴見和子は翻訳した第6章にもあるように、socializationという用語を、人間形成の過程、その社会集団に適合した行動をとる存在に発達させる過程、すなわち広い意味

での教育と同義に用いた。「成年社会化」という用語ももちいて、人間は生涯にわたり変化しつづける存在であることを強調している。鶴見和子の著書全体は、1945年に第二次世界大戦に敗北するまでは、日本ではいわば天皇陛下のために立派に死ぬことを目的にかかげた「死の社会化」教育つまり「負」の方向性をもつ教育が行われ、敗北の後には一転して個人がその生を実現することを目的にかかげた「正」の方向性をもつ教育が行われたことを対照的に描いている。鶴見和子は戦前戦中の学校制度における道德教育と軍隊制度のなかの教育全般が死の社会化を目指して戦争における栄光ある死を賛美し、各人がどのようにそれを内面化していったかを戦没学徒の手記やBC級戦犯の手記のテキスト分析から証明しようとした。それにたいして第6章では戦後の生活記録運動を、とくにその自発的に開発された方法に注目して、戦後の「正」の方向性をもつ「社会化」の実践例として分析し、評価したのであった。「死の社会化」の対極には「生の社会化」があるはずである。わたしたちは「生の社会化」を鶴見和子が次世代へ遺したメッセージとして受取りたいと思う。

筆者西川は、2007年10月にコロンビア大学を訪問した機会に、歴史家キャロル・グラック教授に、鶴見和子が英語で執筆したこの本が英語圏の読者にどのように読まれてきたかについて質問した。グラック教授は、この本は自分やジョン・ダワーが大学院生であった時代には必読文献の一つであったが、現在の学生はこの本をあまり知らないかもしれない、と答えた。じっさいコロンビア大学で開かれた会合に出席していた、なんらかの形で日本を研究対象とする大学院生20名足らずのうち、この本を自分の研究テーマと関連づけて読んだと答えた学生は1人のみであった。

その会合で出会った、雑誌『思想の科学』と思想の科学社を中心において日本の戦後思想を研究する若い研究者アダム・ブロンソンはこの本に強い関心を示し、出版されたときに発表された書評のコピーを集めて提供してくれた。署名入りの長文の書評だけでも9本があり、これ

は1冊の学術書の出版に際して書かれた書評の数としては、少なくない数であると思われる。ジョン・ダワーと同じく鶴見和子の「死の社会化」という表現と、その論理とに注目した書評がある。今回翻訳した第6章も、書評においてしばしばとりあげられており、「生活を記録する会」が提供したライフヒストリーという資料の独自性、その魅力に触れたものが多く、分析によって記述が中断されるのが惜しい、もっと資料をして語らしめることを望むというニュアンスの文章さえある。出版当時の、公民権運動もさかんであった英語圏における読者にとって、生活記録運動の書き、読み、話し合い、共通の問題の解決にむかうという方法論は親近性があると同時に、日本の社会背景のなかで展開されるその様子は、独自性のある運動と認識されたのではないかと思われる。

現在、鶴見和子をもっともよくまとめて読むことのできる著作集である『コレクション 鶴見和子曼荼羅』（1998年、藤原書店）Ⅲ知の巻は、『社会変動と個人』と題されており、ここでとりあげる "*Social Change and the Individual*" のForeword / Acknowledgement / Contents / Introductionが英文のまま掲載されている。原書全体の構想、方法論、テーマ設定理由などについてはこれを参照することができる。しかしこの巻には原書本文の掲載はない。『鶴見和子曼荼羅』のこの巻におさめられている文章はいずれも英文の原書の各章のテーマに関連の深い著作ばかりなのだが、別の機会に日本語による雑誌論文などの形で発表されており、原書の各章そのものではない。したがって、ここに訳出した第6章についても、生活綴方教育あるいは生活記録運動について鶴見和子を書いた多数の文章と共通する箇所があるが、原書翻訳の発表ははじめてである。

鶴見和子自身は、「プリンストン大学で博士論文を書いたときには、包括的な類型および分析枠組みを自分なりにつくって、それでさまざまな分析をおこなおうとした。今から考えると、そうした分析枠組みの作成は大変むだな仕事だったかもしれない。しかし、その分析枠組みをつくるためには、それを書いている時期

に、自分が立ち向かっている問題領域において、当時、到達されていた理論を見渡し、理解しなければならない。それを自分なりに消化して、自分の分析枠組みをつくる、そのような作業を経て、初めて、より自由な自分の思想・理論に到達することができる。私の英文の学位論文は、その意味で、必要なステップではあったけれども、今では、それは使い棄ててもよいと考えている。しかし、それをしなかったら、その後の理論的構築をすることはできなかっただろう」（『鶴見和子曼荼羅』Ⅲ 知の巻 あとがき、584ページ）と書いている。

日本語に翻訳してみると第6章だけをとりあげたこともあって、書評や鶴見和子自身が述べるとおり、博士論文の作法をまもった分析枠組みが文章の流れをさまたげる恨みがある。しかし、戦後の生活記録運動そのものだけではなく、生活記録運動に研究者としてかわる鶴見和子をも研究対象とするわたしたちにとって、英語論文を日本語に翻訳する作業は貴重な経験であった。

英語圏の読者の理解を助けるために、鶴見和子は論文執筆当時の日本語読者には説明が要らなかったかもしれない具体的な事象を英語でいいねいに説明しなければならなかった。戦後農地改革まで存在した小作人制度、村落共同体のなかに位置づけられた家族と個人のありよう、集団就職、工場の生活、擬似家族的関係を利用した管理制度、労働者たちの組合運動参加と内部政治、仲間のあり方、賃金制度をはじめとする社会問題の捉え方などである。英語圏の読者のためになされた、彼らにとっての異文化としての戦後日本の解説が、このテキストを翻訳する現代の日本の学生にとってもたいへん有効であった。当時の英語圏の読者とおなじく、現代の学生にとって祖父母たちの世代の生活はほとんど異文化同然という感想さえ出た。その間に横たわる巨大な社会変動こそが高度経済成長とその破綻であり、それが6月23日の「生活綴り方から『戦後』を考える」シンポジウムのテーマであった。

Ⅲ シンポジウム記録を編集しながら

シンポジウムの開催後も、わたしたちは毎週ランチタイム・ワークショップをつづけて、シンポジウムを準備していた時期にもまして、図書館の開架におかれている鶴見和子文庫の書籍や、澤井余志郎さんと「生活を記録する会」のためまぬ努力によって出版された戦後生活記録運動の記録集や佐藤藤三郎さんの膨大な著作を読みかえし、そして鶴見和子文庫の未公開資料の整理に立会い、また伊那の地に赴いて「生活を記録する会」の合宿に参加することにした。生活記録運動は1950年代の歴史的な事件であるだけでなく、その後すでに50年以上つづけられてきた、わたしたちの同時代を現に生きている活動であることを実感した。

その間には、何かを考えつづけていると、考えるヒントや貴重な資料が向こうからやってきてわたしたちを助けてくれると言いたような出来事がつづいた。佐藤藤三郎さんのご縁で、次世代として農業と都市生活をつなぐ独自の活動を展開している佐藤亮子さんが京都文教大学およびその近隣地域で活動している農業体験グループ「結いの田うじ」の企画により京都文教大学を訪問、講演をしていただいた。

澤井余志郎さんはシンポジウム報告のなかで、工場の操業短縮による労働者の一時解雇はそのまま退職につながる慣習であったものを、鶴見和子からの知らせをうけてすぐさま四日市へ赴いた木下順二、日高六郎が会社側と交渉して6ヵ月後の再雇用の約束をとりつけることに成功したと語っていた。2007年にたまたま京都滞在中であった日高六郎氏にお会いした折に、知識人たちが企業と労働者のあいだの問題を、自分たちの問題として行動することが可能だったのは何故か、という質問をした。信念をもって人を動かすことのできる鶴見和子さんの人柄と、それをうけいれる時代であったのだという答えであった。それも、交渉成立直後に記者会見をおこなって報告し、約束が反故にならないようにしておくなど、そのとき何かができる人が交代に知恵をしばり、時間をかけて、協力したのだという。

日高六郎氏は、この機会にぜひ言っておきたい、鶴見和子の内発的発展論はさまざまな場面で有効な概念であるが、集団を閉じるためにこれを使ってはいけない、内発的発展論という概念は内をたえず外へむかって開いてゆくように用いることが大切だという意味のことをくりかえし述べ、次世代へのメッセージとした。

「生活を記録する会」の方たちおよびその活動を追って研究をつづける辻智子さんとの出会いにひきつづき、「生活を記録する会」と共に演劇の集団創作をした旧「二期会」、現在も東京都練馬区にある「プレヒトの芝居小屋」を根拠地として演劇活動をつづける「東京演劇アンサンブル」の人々との出会いがあった。人間学研究所の所長室でワークショップの回を重ね、シンポジウムを準備し、しだいに共同研究を形成してきたこの二年間の体験をもつわたしたちには、「集団創作」とは何か、そしてまず個々人があってそれから集まり助け合う沸々たる集団の形成の仕方、またそこからうまれる創作の結果にたいして関心をいだかざるをえない。70歳代の現役女優である羽鳥桂さんは若き日に、自分が演じる役のモデルである紡績女子工員の日常生活から出てくることばと行動に揺さぶられながら役づくりを行い、自分自身を創ってきたと生き生きと語ってわたしたちを魅了した。

恵那で長年にわたって生活綴方教育をつづけた新田鉦三氏はシンポジウムに出席した前後にわたしたちにむかって、1952年8月に中津川市で開催された第一回作文教育全国協議会の大会を準備した体験を昨日のこのように語った。鶴見和子はこの会場で「生活を記録する会」の人々と出会って、運動へ参加するにいたったのである。澤井さんたちが子どものための生活綴方教育の教師たちの集まりに出席したことによって、大人のための生活記録運動が意識的、本格的に始められた経緯には、自己開発と助け合うネットワークの形成、という現代に通じる問題がふくまれている。

1952年の中津川の全国作文教育協議会で鶴見和子とおなじく報告者であった大田堯氏にはその後に『戦後日本教育史』（岩波書店、1

978年）の編著書がある。お会いした機会に、鶴見和子の「自己をふくむ集団」という発言がなぜ、会場の人々の心をそれほどにとらえ、つき動かしたのかと質問をこころみた。91歳をむかえながら研究会や講演の日々を過ごす教育学者は、しばらく考えたうえひざを打つという感じで、「自己をふくむ集団」というフレーズには「自己」と「集団」という二つのキーワードがふくまれている、と言われた。当時の人々にとっての二つの大きな問題が一つの表現になってふくまれている、という指摘である。敗戦を期に、国民がほとんどひとり残らず戦争体制にまきこまれたのは何故だったかという反省が巻き起こり、何よりもまず個の確立ということが言われ、そのうえで連帯をはかることがさらに重要であった。その二つの課題が「自己をふくむ集団」という一つの表現になっていることを聴衆はいちはやく感じ取ったのでしょう、という説明であった。わたしにとっては、鶴見和子が英語で執筆した『社会変動と個人』という本のテーマをも解説する、示唆にとんだ指摘であった。

佐藤藤三郎、澤井余志郎の両氏だけでなく、1950年代の生活綴方教育と生活綴り方に関わった方々には共通する気質と行動形態がみられた。一つは日々記録する習慣である。澤井余志郎さんは毎晩、謄写版による文集をつくるためのガリ切りをしないと物足りなくて寝つけないほどであった、と語っている。二つには自発的好奇心にもとづいて自分で調べ、自分の目で見て、自分で考える姿勢が共通する。その三として、他者にたいして開かれた心と他者にたいする繊細な心遣い、そして前向きに働きかける行動形態が特徴であった。次世代にたいしてもつなぐ手をさしのべている。生活記録運動は人格にまでしみこむものであるかのようだ。

シンポジウム準備に際して「つづけ読み、ならべ読み年表」を作成したことによって、日本列島を覆った高度経済成長とその破綻という大きな社会変動がうかびあがった。鶴見和子が『社会変動と個人』という著作でとりあつかった社会変動は、第二次世界大戦であった。戦争は人々の生活と人心を破壊する。鶴見和子の著

作は、その戦争がもたらした廃墟からの再生がテーマであった。シンポジウムにおける佐藤藤三郎さんと澤井余志郎さんは、焼け跡の復興以後の高度経済成長が生活を大々的に変化させ、人心を荒廃させた様子を淡々と報告した。お二人の報告は、わたしたちが高度経済成長の廃墟からの再生を考えるにあたって、各地で各人によって、その生活のなかで持続される微細な定点観測を集めることの大切さをひしひしと感じさせた。今後も大学が、記録の集大成からうかがいあがる社会の全体像や、その動態を見渡し描

き出し、未来を見通す力量をやしなうことのできる教育機関であり、研究機関でありつづけることを願う。

鶴見和子文庫をあらためてひらくこの2年間の作業によって、本誌の前号が記録しているように、鶴見和子文庫が歴史と現代問題を考えるための数々のヒントにみちた資料体であることが見えてきた。ご支援に感謝するとともに、京都文教大学人間学研究所の活動にさらにご支持をいただくことを願って、いったん報告をおえることにしたい。



2007年6月23日 シンポジウムの後片付けが終わったあと、佐藤さん（前列右から3人目）、澤井さん（同、4人目）、「生活を記録する会」のメンバーの方々を囲んで